

「どうして自分は曲がりなりにもここまで頑張ってきたのか？20才は20才なりに、60才は60才なりに」今回は、そんなことについて考えてみたいと思います。

「別に私、そんなに頑張ってきたわけではないけれど…」まずそんな声が聞こえてきそうですね。でもオリンピックの選手や世界を相手に戦っている企業戦士の頑張りをイメージするから、そんな発言になってしまっているだけで、おそらく心秘かに頑張っていることは一人ひとりの心の中に絶対あるのではないかと思います。

<レポートの提出日を守る><タイムカードを押し忘れない>を目標に頑張っている人がいる。<歯磨きを毎食後必ずする><体重を毎日計測して表に記入する>を目標に頑張っている人がいる。これ、見えやすいですよ。回りにも自分からも。

こんな頑張りのありさです。<必ず笑顔で挨拶をする><嫌いな人を作らない>、さてこうなってくると、なかなか回りの人からはその頑張りは解りづらくなるし、自己評価も難しくなります。

さて、こんな頑張りはどうでしょう？<交通ルールを守る><会社に毎日出勤する>…、当たり前過ぎて誰にもその頑張りは解らないまま(気づかれないまま)過ぎていってしまいそうです。

そこでもう一度最初の質問に立ち戻ってみます。「人は、なぜ頑張ることができるのか？」私の答えは「それはその頑張りを見守ってくれる人がいるからだ」です。特に見えない頑張りをちゃんと知っていてそっと寄り添っていてくれる人がいたり、その頑張りを見つけて褒めてくれる時に、人は俄然頑張れるものです。

障がいのある方々の頑張りは、そのほとんどが解りづらいものです。さらに家族でもない方々と一緒に集団で暮らすという環境条件（入所施設はもちろん、グループホームでさえも）のもとでの頑張りは、そのほとんどが当たり前のこととしてさらりと無視されていっているの

はないでしょうか。

決められた時間に食事する、決められた時間に入浴する…彼らの頑張りに（我慢という頑張り？）によって支えられているそうです。おそらく起きる、眠るでさえも彼らの頑張りに支えられています。

家族との面会や帰省についてはどうでしょうか。彼らは必要以上に寂しさや悲しさをこらえて頑張っている可能性は無いのでしょうか。たとえ面会や帰省があったとしても、それは職員や家族の都合で、本人が本当に会いたいときに（ちょっと寂しくなった時に）実施されている帰省や面会になっているのでしょうか。支援職員は、そんな頑張りに気づいて、心寄せながら「寂しいのによくやっているね…」なんていう声をかけることができているのでしょうか？

さらに障がいを抱えて生きることについての頑張りについてはどうでしょうか。

理解することはできても伝えられない、喋ることができない苦しさや切なさの中で、それをこらえて生きている彼らの頑張りにどのくらい私たちは心を寄せることができているのでしょうか。また逆に理解できない状況やコミュニケーションに困惑しながらも精一杯適応しようとしている彼らの姿に気づくことができているのでしょうか。「本当はやりたかったんだよね。でもどうしたらいいのか解らなかったんだよね」彼らの一生懸命に私たちはきちんと答えることができているのでしょうか。

彼らの「頑張り」の中心は見えずらいところにあります。しかし、誰かがその頑張りを見つけて心を寄せることをしなければ、彼らは頑張り続けることができなくなります。

私たちが心のどこかで自分の頑張りを認めて欲しいように、彼らも誰かが自分の頑張りを見つけてくれるのを待っているのです。まずは、自分が何を頑張っているのかをちょっと考えてみましょう。特に見えにくい奴、それを心の奥から引っ張り出してみましよう。…いかがですか？